アプリ活用、健康に貢献

次代を創る とちぎ気鋭の経営者 ③

ならでわ（宇都宮） 大塚 拓也 社長（37）

大学と連携し自社開発

顧客管理やヘルスケア関連のアプリ開発を手がけるならでわ（宇都宮市）。大塚拓也社長（37）は人材派遣会社の起業やIT企業勤務を経て、再び起業した。国の補助事業に採択され、大学と連携してヘルスケア分野での研究やアプリ開発を進めるなど業容を拡大している。

（聞き手 仁平裕人）

―事業内容について教えてください。

「アプリなどを自社で開発して提供しています。売れ筋はエステサロンなど向けの顧客管理アプリ『BEFORE AFTER（ビフォア・アフター）』で、現在では3万5千社ほどで利用されています。サブスクリプション（定額利用）が収益の柱です」

―現在取り組んでいるプロジェクトは。

「サルコペニアと呼ばれる高齢期にみられる骨格筋量や身体機能が低下する現象を、アプリを通して改善しようとしています。9月に経済産業省の成長型中小企業等研究開発支援事業に採択され、県外の大学と共同で研究、アプリ開発を行っています。将来的には介護施設などでの利用を想定しています」

―高校卒業後に起業されました。

「人材派遣会社を知人と立ち上げました。ただ毎回契約を取って人を割り振っても当日無断でキャンセルされることも多く、やりきれない思いがありました。その時に漠然と、何かを積み上げていく努力をしたいと思いました。現在のサブスクサービスも、当時の思いがつながっています」

―その後、IT起業で働かれてますね。

「リーマン・ショック後にこれからはITの時代だと思い、ITエンジニアを目指して都内で3年間働きました。親の介護などもあって栃木に戻り、2014年に当社の前身にあたる企業を設立しました」

―仕事をする上で大切なポイントは。

「カスタマーサクセス（顧客の成功体験）です。アプリを最初に導入する時に、お客さまが『よく分からないからやっぱりやめる』というのをなくすため、使いこなせるまでサポートしています」

―今後の抱負は。

「仕事のやりがいと待遇の両面で、魅力ある企業にしたいですね。加えて栃木をアプリの街にして、子どもたちが将来住みやすい環境をつくっていきたいです」

（下野新聞デジタル」に詳細版）

栃木市出身。高校卒業後、人材派遣会社を起業したほか、都内のIT企業勤務を経て、2014年にならでわの前身となる企業を設立した。本社は宇都宮市伝馬町1の6。従業員数8人。

自社で開発したアプリを紹介する大塚社長

栃木トヨタ 宇都宮北西部を支援

観光スポットに車両展示

大谷資料館の地下空間で過去に行われた車両展示会＝2022年7月、宇都宮市

栃木トヨタ自動車（宇都宮市横田新町、新井孝則社長）は、宇都宮市の大谷地区など同市北西部の観光振興に向け、11～12月にかけて観光スポットでの車両展示などを行う。

同社は同地区で運行する時速20キロ未満で公道を走る電動自動車「グリーンスローモビリティ」の整備を担うほか、大谷資料館の地下空間で車両展示を行ったこともある。これまでの経験を生かして、今回は取り組みを拡大する。

「フェスタin大谷」の開催に合わせ、11月10日には同資料館の地下空間で車両展示を行う。同29日～12月1日は、ライトアップされた竹林農場「若竹の杜」若山農場」で環境に優しい電動車を展示。初日の点灯式では電動車から給電した電気で点灯するほか、電源設備がなく普段はライトアップできない「大ケヤキ」を給電した電気でライトアップする。

12月14日は、自転車のオフロードレース「全日本選手権大会シクロクロス」が開かれる道の駅うつのみやろまんちっく村で車両を展示する。

新井社長は「大谷資料館の地下空間や若山農場の竹林に車両を展示し、会場をより一層幻想的、神秘的な雰囲気にしたい。宇都宮市北西部の観光拠点をパッケージとして支援し、宇都宮観光を盛り上げたい」と話した。

（伊藤一之）

物流業界の負担軽減を

栃木労働局が企業視察

トラック運転手の残業規制強化に伴って物流が滞る「2024年問題」が懸念される中、栃木労働局の川口秀人局長は5日、運転手の負担軽減に取り組むコマツ物流（東京都、西川知良社長）と芳賀通運（真岡市、塚本貴士社長）の取り組みを視察した。

トラック運転手のための休憩スペースを見学する川口局長（左から2人目）ら＝5日午後、小山市

同局によると、本県の運輸業・郵便業の月の総労働時間（2023年）は188・6時間で、全国平均（167・7時間）より20時間以上多い。21年から23年にかけて労働時間が増えており、改善が必要という。

視察に訪れたコマツ小山工場（小山市横倉新田）で西川社長は、運転手の拘束時間短縮のための工場内の荷下ろし場の集約や、荷下ろし場予約システムの導入などを紹介。塚本社長は鉄道や船舶といったトラック以外の手段による輸送量を増やす「モーダルシフト」や、中継拠点で別の運送会社に運転手を交代する「スイッチ輸送」について説明した。

参加者は同工場に今年整備された運転手のための休憩スペースも見学した。川口局長は「運転手の労働時間短縮は物流会社が取り組むだけでは限界があり、荷主の協力がないと難しい。両者が連携した取り組みは他企業の参考になる」と話した。

（上野貴朗）

輪島塗300点を展示販売

能登災害の特別講演も

宇都宮市今泉町のFKD宇都宮店で7～12日、石川県輪島市の伝統工芸「輪島塗」の展示販売会「新・輪島塗展」が開かれる。9、10日には、同市の漆器店経営者が地震や豪雨で被災した能登半島の現状について講演する。

あすからFKD宇都宮店

同店は毎年11月、漆器ブランド「千舟堂」を展開し、食器などを製造販売している岡垣漆器店（輪島市河井町）の製品の展示販売会を開いている。今回は器や飾り物など300点以上を展示し、予約注文や即売で販売終了。同社と繋がりの深い講演で、

野生イノシシ向け

豚熱ワクチンを山林に空中散布

県対策協議会

県や市町、畜産関係団体などでつくる「県豚熱感染拡大防止対策協議会」は5日、野生イノシシへの経口

政経部経済担当 電話028・625・1060 ファクス028・625・